

防災ニュース 第11号



2022年の災禍を振り返る（1）

～ 社会インフラの危うさと備え ～

皆様こんにちは。日本列島は昨年も多く災害等に見舞われました。2022年12月26日、名古屋大学名誉教授 福和伸夫氏が「ヤフー・ジャパンニュース」で解説された記事の中から、1年を振り返り危惧される社会インフラの危うさやこれからの備えについて、2回に分けてご紹介します。

【 コロナ第6波の感染拡大と共に始まった2022年 】

今年もコロナのまん延から始まりました。年明け早々の1月9日に沖縄など3県でまん延防止等重点措置が適用され、その後2月12日までに37都道府県に拡大し、3月21日にすべて解除されました。この時の新規感染者数は1日当たり最大10万人程度でしたが、7月に訪れた第7波では26万人を超えました。10月には少し収まりましたが、その後増加に転じ、再び20万人を超えています。重症患者は減っているようですが、人が集まる年末年始が心配です。

【 トンガの海底火山噴火によって日本にまで津波が到達 】



1月15日に、トンガにある海底火山のフンガ・トンガが大規模噴火しました。この噴火によって、世界各地の沿岸で潮位変化が観測されました。日本でも奄美大島で1.2mの潮位変化を検出したため、北海道から沖縄県の太平洋岸に津波警報や注意報が発令されました。それまでは、津波は地震によるものと考えられていましたが、防災上の観点から発表されました。日本列島の広範囲に津波警報や注意報が発表されたのは2011年の東日本大震災以来のことです。

【 日向灘沖の地震で南海トラフ地震臨時情報に一喜一憂 】

1月22日の午前1時8分頃に日向灘の深さ45キロでM6.6の地震が発生し、大分県や宮崎県で最大震度5強を観測しました。震源は南海トラフ地震の想定震源域の近くですが、沈み込むフィリピン海プレートの内部での地震でした。南海トラフ沿いの地震に関しては、M6.8以上の地震が起きると規模の大きさに応じて「南海トラフ地震臨時情報」が気象庁から発表されることになっています。

今回の地震では、気象庁が地震波を検知してから確定するまでに、一時M7.2の推定も出たため、マグニチュードの変化の中で気象庁の担当者は一喜一憂したのではないかと想像されます。もし、南海トラフ地震臨時情報が発表されていたら、初めてのことで、日本中大騒ぎになっていたと思われます。

ちなみに、12月16日には、南海トラフ地震臨時情報とよく似た仕組みが、日本海溝・千島海溝沿いの地震に対しても導入されました。北海道・三陸沖後発地震注意情報と言い、M7.0以上の地震発生で気象庁から発表されることとなります。

【 新幹線が脱線し大規模停電も発生した福島県沖の地震 】

3月16日23時36分に、福島県沖の沈み込む太平洋プレート内の深さ57kmでM7.4の地震が起き、宮城県と福島県で最大震度6強、宮城県北部で長周期地震動階級4の揺れを観測しました。この地震では3人が死亡し、5万棟近くの住家が被害を受けるとともに、営業中の東北新幹線が脱線し大規模停電が発生しました。

実は、この地震の2分前に福島県沖の深さ57kmを震源とするM6.1の前震が発生していました。前震による緊急地震速報（警報）が23時34分頃に発表されたため、本震による強い揺れが到達する前に新幹線は停車していました。もしも前震が起きていなかったらと思うとぞっとします。

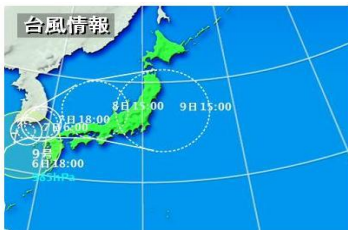


この地震では、多数の火力発電所が停止し、東北地方や関東地方などで大規模な停電が発生しました。特に東京電力管内ではブラックアウトを防ぐため、安全装置が作動して200万戸を超える停電となりました。3月21日には、発電所の停止と悪天候・気温低下に備え、経済産業省が初めて「電力需給ひっ迫警報」を発出しました。

【 能登半島での群発地震 】

6月19日にはM5.4の地震が発生し、珠洲市で最大震度6弱の揺れを観測しました。能登半島先端部では、2020年12月から地震活動が活発になり、6月20日にM5.0、最大震度5強の地震が、9月16日にM5.1、最大震度5弱の地震が発生するなど、本年だけでも震度4以上の地震が10回も発生しています。この群発地震の原因としては、地下から上昇した流体に伴う岩盤の膨張などが指摘されています。ちなみに、能登半島周辺では、2007年3月25日にM6.9の能登半島地震が、1993年2月7日にM6.6の能登半島沖の地震が発生しており、今後の地震活動の推移が心配されます。

【 連続して来襲し激甚災害に指定された台風14号と台風15号 】



9月には、台風14号と15号が相次いで来襲しました。台風14号は、日本列島に接近する直前に中心気圧が910hPaと、1959年伊勢湾台風（929hPa）や1934年室戸台風（911hPa）を上回る強さになりました。

このため、最悪の事態も心配されましたが、9月18日に鹿児島市付近に上陸した時には中心気圧は935hPaとなり、九州を横断した後、日本海側を通過して東北地方を横断して温帯低気圧になりました。各地で記録的な大雨や暴風が発生し、死者5名を出すなど、沖縄県から秋田県に至る27県で被害が報告されています。

一方、台風15号は、規模は大きくはなかったものの、静岡県の中西部を中心に猛烈な雨が降り、3名の犠牲者を出すとともに、7万6千戸で断水などが生じました。14号と比べ、事前の気象情報が十分でなかったことが指摘されたりしました。

（次号に続く）

以 上